

U021-04

会場:304

時間:5月24日 09:40-09:55

大森房吉はなぜ「東京に大地震が起きる心配はない」といったのか？ Why did Prof. Oomori say that Tokyo big earthquakes would never happen?

泊次郎^{1*}

Jiro Tomari^{1*}

¹ 東大地震研究所

¹ ERI

1923年の関東大地震が起きた後、オーストラリアでの第2回汎太平洋学術会議から帰国した東京帝国大学地震学教室教授・大森房吉を待ち受けていたのは、「大森地震学」に対する批判であった。大森はそれまで「東京は当分、大地震が起きる心配はない」との発言を繰り返していたからである。大森は失意のうちに間もなくこの世を去った。大森はなぜ、このような発言を繰り返していたのであろうか？東京大地震の予測をめぐる大森と助教授・今村明恒との論争は、すでに多くの人によって取り上げられてきたが(例えば、萩原尊禮『地震学』百年)、関東大震災以降の地震発生予測の例も含めて、科学者の社会的責任という観点から、改めて考えてみたい。

事の発端は、安政2年(1855)の江戸地震から50年後の1905年9月に、今村が雑誌『太陽』に書いた「市街地に於ける地震の生命及財産に対する損害を軽減する簡法」という論文である。論旨は、地震の後火災が発生すると死者は数倍にも増えるので、地震対策として火災防止が重要であり、そのために石油ランプを廃止して、電燈に代える必要がある、という点にあった。今村は、この論旨を強調するために、江戸で1000人以上の死者を出すような大地震は、これまでに慶安2年(1649)、元禄16年(1703)、安政2年の3回、平均100年に1回起きており、安政の地震からはすでに50年が経過しており、慶安の地震から54年で元禄の地震が起きた例もあるので、「災害予防のことは1日も猶予すべきにあらざ」と書いた。

翌年1月になって、『東京二六新聞』が今村の論文を「大地震襲來說」として紹介した。1906年は、丙午の年であった。当時は「丙午は厄年で、大火や洪水などの災害が多い」との俗説が大きな影響力を持っており、『二六新聞』はこの俗説にひっかけて読者の関心を誘ったのである。この記事が掲載された1週間後の1月21日には関東地方に強震があり、2月23日と24日午前にもやはり強震があった。24日午後には、何かが中央気象台の名前をかたって、官公庁や病院、外国大使館などに次々に電話をかけ、「午後3時から4時までの間に大地震がある」などと告げた。このため、進歩党代議士会などの集会は中止になり、多数の市民が日比谷公園などに避難する騒ぎになった。

これに対して、大森は「大地震の襲来の浮説に就きて」との論説を新聞や雑誌に寄稿し、「大地震の平均年数から将来の大地震の時期を予測するのは意味がない」「江戸に大被害を与えた地震は安政2年の1回だけで、東京が大震災を蒙るのは平均数百年に1回」などと主張し、今村の論文を「浮説」と決め付けた。騒ぎは間もなく沈静したが、大森は関東大震災の直前まで「東京が大地震に見舞われる心配は当分ない」と言い続けた。

大森は、なぜこのような発言を繰り返したのであろうか？第1にあげられるのは、大森は地震学の研究者としてよりも、震災予防調査会の幹事としての行政官の立場をより強く意識していたことである。大森は、全国各地で地震や火山噴火、土砂崩れなどがあると、知事からの要請に従って現地を視察し、「それほど心配には及ばない」などと、人心を安定させる役割を果たしていた。関東大震災後、今村は「先生は民心鎮静の犠牲となられた」と書いている。

第2に、東京に大地震が起るとの今村の予測の根拠もあやしく、かつ予測もあいまいで、デマを生む余地があった。慶安の地震による死者は50人程度であり、元禄の地震の被害も大森がいうように小田原などが中心であった。予測の表現も科学的というよりも情緒的である。

第3に大森は、大地震は地震帯の中でまだ地震が起きていない隙間を埋めるように起きるが、一度大地震が起きた場所では再び大地震は起らないという「地震帯の原理」を信じていたことである。

第4は、当時の社会の人々の地震に関する知識の不足である。科学的に明らかになっていることを丁寧に説明されるよりも、断定的なものの方が好まれたように見受けられる。

関東大震災以降は大森・今村論争が教訓となったのが、日本では地震研究者が“安全宣言”を出した例は見られない。むしろ、地震発生予測情報は次々に出されるものの、その大部分は当たらない、という問題を抱えているように思われる。講演では、こうした例についても紹介し、科学者の社会的責任という観点から議論する。

キーワード: 関東大地震, 大森房吉, 今村明恒, 地震予測情報, 科学者の社会的責任

Keywords: the great Kanto earthquake, Husakichi Oomori